

アメリカ先住民の歴史における女性達（I）

坂本ひとみ

1) はじめに

従来、アメリカ史の中で、アメリカ先住民——インディアンと呼ばれる人々——の歴史は影の部分とされてきた。その中でも、アメリカ先住民の女性となれば、一層、日の当たらない存在であった。インディアン側からの証言という本をひもといても、有名な文章として残っているものは男性のチーフや戦士の言葉ばかりで、女性の記述はなかなか見出せなかった。

が、アメリカの書店をのぞくと、それが変わり始めたことに気づく。インディアン女性達の写真入りの自伝、回想録、詩集などが注目を浴びつつあるのだ。また今年（1995）は、生誕400年ということで、ディズニー映画がインディアン女性、ポカホンタスを取り上げ、アメリカ中の子供がポカホンタスの人形を持って遊ぶこととなった。そして何よりも私自身、現代に生きるインディアンの人々と会って、いかに女性達が部族のための仕事に励み、家族を支え、若い青年や子供達がインディアンとして生きる誇りを取り戻すための教育に尽力しているかをつぶさに見て、感銘を受けている。

このエッセーにおいては、アメリカ先住民の女性を歴史的に概観し、数人の女性達を取り上げるが、アメリカ合州国政府のインディアン政策を批判した白人が、ヘレン・ジャクソンという女性であったことにも触れたいと思う。また、フロンティアにおける白人女性とインディアン女性との交流の様子も描写してみたい。

最近、「インディアン」という言葉は蔑視用語であるとして、「ネイティブ・アメリカン」と改めよ、という風潮があるが、彼ら自身、自分達を「インディアン」と呼んでいるし、アメリカ・インディアン運動（AIM）においても、呼び方だけ変えても内実が変わらなければ何にもならないと彼らが言っていることを鑑みて、私も時に応じてこの言葉を使わせて頂くが、決して侮蔑的ではないことをお断わりしておく。そして、本多勝一氏の論理に同意して、「アメリカ合州国」⁽¹⁾と記させて頂く。

2) アメリカ先住民女性の地位

アメリカ先住民の女性の役割を考える時、家族形態が大いに関係してくるのだが、この点で、日本のそれと似通うものを感じることもある。西欧キリスト教文明では、「人間関係の基本は夫婦」という確固たるベースがあるが、日本は歴史的に見て、夫婦よりも親子の絆が強く母系色の濃い国であると家族社会学者は述べている。夫と妻が互いを「パパ」「ママ」と子供の立場から見た呼称で呼び合うのが、そのいい表われといえよう。徳川時代でも離婚、再婚は頻繁で、試し婚をしてみて合わなければすぐ別れるということも多くあった。現代においても、子供を祖父母に預けて夫婦はそれぞれ出稼ぎに行く、というケースも間々ある。インディアンの場合は、300程の部族があって一概には言えないが、一般的に離婚、再婚は昔から簡単であり、今でも全くそうである。子供のしつけも、両親よりも叔父や叔母といった親戚が大いにその役目を果たす。夫婦が核というよりも、大家族的発想が社会の根底にある点で、インディアンと日本人とは共通しているように思う。

ナバホのような母系制社会では、財産と重要な仕事に就く権利は女系で相続されている。アメリカの北東部、南東部、南西部には母系制社会が多く、女性が家族内で有する力や権威は大きなものだった。結婚すると夫婦は妻の実家の近くに居を構え（現代の日本にも似通う現象がある）、子供達は母親の家系を引き継ぐこととなる。が、女性が重んじられていたことを、白人男性の歴史家はあまり記述しようとしなかった。

インディアン社会においては、男性と女性の役割分担がそれぞれはっきりあり、お互いに相手に依存し、尊敬を払っていた。狩りをし女性では入手できないものを得るのに、女性はどうしても男性のパートナーを必要とした。離婚や死亡で夫を失った場合には、姉妹の夫と結婚することもよくあった。男性の方は妻をふやすことで自分の家の生産能力を向上させて、親戚に食物を分けてやることができた。

この一夫多妻制度は、歴史家（大抵は白人男性でキリスト教徒）によって軽蔑をこめて記述された。宣教師たちはやっきになってこの制度をやめさせようとした。が、インディアンの側からすると、同じ男に嫁いだ姉妹達は、結婚後も夫と仕事を共有しつつ一緒に暮らすことができたのに、この制度をやめさせられることにより、分断されてしまうこととなった。

アメリカの歴史というのも、白人の視点ではコロンブスの到達から始まるが、インディアンの人々はそれよりもっと過去の時代に対して、各部族の歴史認識を持っている。アメリカの白人にとっては輝かしいフロンティアの時代も、インディアンにとっては駆逐され居留地へ追いこめられた時代となる。アメリカ先住民の神話や伝説を見ると、女性を世界の起源とみなす文化圏がいくつもある。彼らの神話においては女性は肯定的に描かれているが、西洋

世界では男性の唯一神を信仰し、エバは悪い女とされている。チェロキー族の人達は、自分達はコーン・マザー（トウモロコシの女神）から生まれたと信じ、イロクォイ族はグランドマザー・タートルと呼ばれる大地の背中の泥の塊が自分達の祖先と考える。

聖なるリーダーであるメディスン・マンは男性であることが多かったけれども、実際の治療者として女性もその役を果たした。彼女達は薬草について詳しく、病人食を作ってやることもし、産婆としても活躍した。家作りやボート作りにも腕を発揮した。また農業に携わる人として、新たな食物をいろいろ開発した点で、インディアンの女性は、大いに白人にも貢献したといえる。トウモロコシ、豆、カボチャ、いも、ピーナッツ、トマトなど、そして染料や薬のとれる植物など、みな、彼女達がもたらしたものである。

19世紀初め、セントルイスから太平洋岸へ達したルイスとクラークの探険には、サカジャウェアというインディアン女性が、道案内として、また通訳として大いに役立ったことはよく知られているが、初期の毛皮の猟師や商人達にとってもインディアン女性は欠かせない存在であった。彼女達は地元の地理に詳しいし、食物、住まいも確保できるし、病気になった時に彼女達の手当てによって命拾いした白人男性も数多くいた。白人との交易がふえ、革なめしの技術は女性だけが持っていたため、彼女達の仕事もふえた。

彼らはそういう女性を妻とすることもあれば、一時の愛人とすることもあり、東部で白人女性との家族、フロンティアでインディアンの家族を持つ、という場合もあった。

白人の視点から見れば、白人の妻となったインディアン女性は、楽で結構な暮らしができるようになったと思われたが、実際は、彼女達がインディアン社会にいた時と比べて、自分の生活や子供、離婚する意志、財産に対するコントロールはずっと縮小されたのである。

19世紀中葉に入って西部における白人人口が飛躍的に増大すると、インディアンに対する人種差別は日常茶飯事となり、インディアン女性との結婚は避けようという傾向が出てきた。

白人の入植者が来るようになって、インディアンの女性の政治的、経済的、社会的地位は低下した。白人は女性のインディアンと交渉するのを嫌がった。インディアンの方は、重要事項を決定するのに白人の女性が全然参加していないことに驚いた。男性優位の思考は白人がもたらしたものだ。

それまでインディアンの間ではなかったレイプも白人が初めて行なったことだった。インディアンから食物、毛皮、金のみでなく女性も奪おうとして、よくいさかいが起きた。しかも彼らはその女性を家畜のごとくに扱った。インディアン同士でも、女性や子供は物のように扱われて捕虜にされたりすることがあったが、それでも、その捕えた方の部族に受け入れられ、養子にされたり妻にされたりした。が、白人の捕虜となった女性は、奴隷かセックスの対象とされただけで、妻や子にはしてもらえなかった。そのような奴隷化は19世紀後半に

なってもまだ続いていた。

白人文化が浸透して、家族内の関係も変わってしまった。パイユート族の女性の自伝⁽²⁾によると、かつて男達は、妻が出産する時、家事を全て引き受け、子守りを手伝い、妻の体を案じるやさしさを持っていたのが、白人男性からそのような過去のやり方を軽蔑するよう教えられて、そうではなくなってしまったという。

19世紀の中頃から、合州国政府がインディアンの男達をキリスト教徒の農夫に仕立てあげようとする政策を進める過程で、農業従事者としてのインディアン女性の地位も奪われていった。居留地に追いこめられて以降は、かつて彼らを生き生きとさせていた生業をも奪われ、誇りと名誉も失われていくのである。

3) ポカホンタス

1995年度制作のディズニー映画は、『ポカホンタス』——イギリスのヴァージニア植民地建設の中心人物の一人、ジョン・スミスとポカホンタスのロマンスを謳いあげたもので、「一生に一度の恋したことがありますか？」がキャッチ・コピーであった。映画のプログラムには、「ユニークな試みのひとつとして、アメリカ先住民の立場から入植の歴史を検証した点があげられる。過去に映画化された歴史ドラマでも、こういった例はない。」とあり、なるほどヴァージニア会社の総督ジョン・ラトクリフの金鉱を求める貪欲ぶりは正直に描かれている。が、「歴史的な背景を踏まえて、史実のみにとらわれない脚色がなされている。」という通り、映画のストーリーは、史実からはかけ離れたものとなっている。1995年9月3日付の『ニューヨーク・タイムズ』の記事でも揶揄されている通り、ジョン・スミスは、この映画で俳優メル・ギブソンの甘い声で演じられるようなやさしい人物などとは程遠く、インディアン達が恐れをなした苛酷な男だったという。ポカホンタスの父は、ポーハタン部族連合の首長ポーハタンであるが、その弟の髪の毛をつかんで、スミスは、「トウモロコシを船に積み！ さもないとお前らの死体を積むぞ！」と叫んだといわれる。スミスがインディアン達によって処刑される寸前、ポカホンタスが身を挺してその命を救った逸話は、アメリカでは建国神話の一つとして広く知られている。が、ことの次第はそうではなかったようである。スミスを彼らの部族に受け入れる儀式のために、彼をいったん殺し新たに生まれ変わって彼らの仲間に入れるという想定であり、族長の娘としてポカホンタスはスミスの「母親」役を務めて、彼の上におおいかぶさっていた、ということらしい。そして、ポカホンタスはスミスとではなく、ジョン・ロルフというイギリス人と1614年に結婚した。彼はタバコ栽培法を改良してヴァージニア植民地の繁栄の基礎を築いた男であり、この結婚は、植民事業とインディアンのキリスト教化の成功の実例として宣伝され、夫婦は揃ってロンドンに送られ、

彼女はアメリカの「王女」としてもてはやされた。しかも、この結婚により、インディアンと白人の間に7年間の「結婚の平和」がもたらされたといわれる。

しかし事実とはいえば、ポカホンタスは、結婚の前年の1613年に誘拐され、植民地側に人質にとられており、父ポーハタンにつきつけられた人質解放の条件は、ひどく苛酷なものであった。またジョン・ロルフが述べた彼女との結婚の動機そのものも全く政略的なものだった。とても、ポカホンタスがロルフに対する愛情を抱けるような状況ではなかったのである。したがって、「結婚の平和」も真の和解からは程遠く、まだ力が十分でなかった植民地側が、族長の娘を人質にとって作り上げた卑劣な戦略であり、恐怖の上になり立つ偽りの平和にすぎなかったと思われる。だからその平和は、植民者の数がふえて力のバランスが植民地側に傾き、一方インディアン側の恐怖も絶頂に達する時、たちまち崩れ去る態のものでしかなかった。

ポカホンタスはといえば、イギリスから早く故郷へ帰りたくと願っていた頃、天然痘にかかってしまい、22歳の若さで客死。テムズ川沿いのセント・ジョージ教会に葬られたのであった。初期のアメリカ入植者とインディアンとの平和のシンボルのようになされているポカホンタスであるが、インディアン女性として決して幸福な生涯を全うしたとはいえないようである。そして彼女が倒れたこの伝染病は、白人から新大陸へともたらされたがインディアン達には免疫がなく、莫大な数のインディアンが命を落とすこととなった。後に、アメリカ合州国軍は意図的に細菌戦を展開。天然痘の菌のついた毛布をインディアン達にばらまいて、彼らを滅していったのである。

ついでながら、こんな映画であるのに、ポーハタン首長の声をラッセル・ミーンズが演じているのである。かつては、アメリカ・インディアン運動 (AIM) の過激なメンバーの一人として逮捕されたり引き回されたりしたラッセル・ミーンズは、先にもハリウッド映画『最後のモヒカン族』の重要な役どころで出演。AIMも墮落したかに思えるが、それはリーダー格の人々の場合であって、私がサウス・ダコタのウーンデッド・ニーを訪れた時、かの地で出会った無名の人々の中に AIM の精神はまだ脈々と息づいていると感じたことは付け加えさせて頂こう。

4) 19世紀のフロンティアにおける白人女性とアメリカ先住民女性の交流

これまで白人対インディアンの関係を考察する際に、男性、女性それぞれの場合を分けて考えられることはあまりなかった。ということは、両者とも同じようなのだと想定されていたことになる。いや、すべてが男性中心に考えられていた、といてよい。が、19世紀にフロンティアへ進出していった移住者達の記録を分析してみると、男性と女性では、イン

ディアンに対する見方が違うことが明らかになってくる。

インディアンと現実に出会って、女性達のインディアン観は以前と変えられていくのに、男性においてはその変化がほとんど見られないのである。男性にとって、西部の荒野とインディアンとはひとまとめにして征服すべき対象であり、自分の強さに自信を持っている男達は、インディアンを劣等、野蛮と見ることで、自分達が彼らの土地を奪うことを正当化しようとしたのである。白人男性とインディアン達は、土地のこと、戦闘のことで交渉することはしばしばあっても、個人的に親しくなる機会はありません、交流が深まることもめったになく、従って彼らのインディアン観も変化しなかったのである。インディアンに対して同情、共感の心を持っていた男性もいたが、そういう人は、実際に彼らとつきあって思うようになったのではなく、もともとそういう考えを持っていたのをフロンティアでも貫いたのであった。

一方、女性達は、物々交換をしたり、子供のこと、病気を治す植物のこと、女性が好む品物や食物、手工芸のことなどから親しくなって互いに助け合うようになり、彼女達の中に友情が芽ばえる機会もより多かったのである。そもそも西へ西へと開拓地を求めていくのは男性の衝動であり、子供を生み育て家を築きたい女性の願望とは合致しなかった。両者の価値観の違いが、インディアンに対する見方にも反映されているといえる。

また、インディアンを武力で威圧しようとする男性に対して、女性は、ソフトな問題解決法をとるよう長く教えられて育てられてきたし、肉体的には男性より弱いので、戦わないで問題を回避する方法を選ぶことから、白人女性達は、インディアンと接するのに、よりソフトな手段、態度をとったのであった。インディアンに対して白人女性達は初め恐怖心を抱いていたが、同情も感じておりアンビバレンスの心理状態にあったのが、次第に彼らに対して温かい心情を持つようになっていくことが彼女達の手記の多くから読みとれる。

インディアンは白人の子供をさらっていくと恐れられていたが、そのインディアンにベビーシッターを頼む女性もいて、彼らがインディアンの習慣や言葉を自分の子供に教えることを喜んでいる女性の記述もある。インディアンの産婆に出産を手伝ってもらったり、赤ん坊が生まれたら、インディアンの女性達がとても喜んでプレゼントを持って祝いにきてくれたりしたことも書かれている。インディアン女性の髪にウェーブをつけてあげたら、それ以降親しくなったという例もある。

私も赤ん坊連れでインディアンの国を旅し、特に赤ん坊のいるナバホの女性とは、子育ての悩みを相談しあったりして仲よくなり、彼女が私の髪をナバホのヘアスタイルに結ってくれて、一層親しくなったことがあるので、そのような記述には大いにうなずかされる。また、白人の文明社会に比して、インディアンの素朴で気どらず率直な人間性にふれてほっとする

という白人女性の記述にも首肯させられる。インディアンの人達が女性のみならず男性も非常に赤ん坊好きで、私の子供にもあたたかく目を細めて接してくれるやさしさには実に嬉しいものがあった。子供を愛する者同士、人種の壁をのりこえて同じ人間なのだと感じる機会も多かったのだろう、と納得させられる。

フロンティアでは幼い子供が亡くなることもしばしばあったが、そういう折にも、インディアン女性達が涙を流して弔意を表わしに訪れてきてくれたという。フロンティアで生きた白人女性アリス・ダーリン・ランドの回想録に出てくるチペワ族との交流の様子を引用する。

私は、姉（妹）の赤ん坊が亡くなった時、インディアンの女性達が葬式の前に弔意を示しにやってきた時のことを覚えています。彼女達は精一杯自分達の気持ちを示そうとして、姉（妹）のことをやさしくなめました。彼女達は英語が話せないのです。私達が赤ん坊を見せると、彼女達はその子を見て、大粒の涙がその頬を流れおちました。本当に、彼女達は私達の気持ちをやわらげてくれました。誰も想像がつかないでしょうが、私達はあの人達の友情を有難く思っていたのです。4人の既婚婦人と2～3人のインディアン娘が来ていました。そのうちの一番年長の女性が他の女達に合図すると、皆、ひざまずいて、その年長の女性がお祈りを捧げてくれました。私達も彼女達のしていることを理解してひざまずき、悲しみにくれる私の姉（妹）を心の底から慰めたいと思っている彼女達の誠実さを感じていました⁽³⁾。

私もこれと似た経験をしたことがある。私が仲よくしている白人の一家のもとへインディアンの友人達を連れて行った時、その白人のお父さんが病気であることを知って、そのインディアンの人が「お祈りを捧げよう」と申し出、皆で手をつなぎ合って彼のお祈りを目を閉じて聞いたのである。

勿論、白人男性においても、子供を亡くした悲しみは同じであろう。が、彼らは、そういう私的な深い感情をあまり表に出さないようにと教えられてきたために、日記の中の叙述もただ“Baby died!”と書かれているだけなのである⁽⁴⁾。

19世紀の女性達は肉体的には非力な弱い存在とみなされ、精神的、道徳的には家族の光となるべきすぐれた存在である、と両極端の見方をされていた。そしてインディアンの方も、恐ろしく野蛮な存在であるが、一方、不可思議な高貴な存在という両極で考えられていた。インディアンの女性についても二つのステレオタイプ化したイメージが作られ、一つは粗暴で汚ならしくて墮落した存在、もう一方は、ポカホンタスのような「王女」的イメージで、

高貴なリーダーの娘として思いやりがあり美しい女性、というものである。フロンティアに出て行った女性達は、実際に自分達が荒野で仕事をし、責任を果たすために頑張っていくうちに、自分達は想定されていたほど非力な存在ではないということに認識し始め、その弱いイメージをくつがえすのと同時に、インディアンに対する両極の見方も徐々に捨てて、彼らとつきあううちに、インディアンも自分達と同じ普通の人間なのだ、というように見方が変わり、共感を持つようになっていったのである。

勿論、以上まとめてきたことはすべてのケースにあてはまるわけではなく、テキサスのインディアン部族は好戦的で白人との衝突が激しく、テキサスの白人女性達のインディアン観はあまり変わるチャンスがなかった。また、インディアンに対して親しみをこめた記述をしている女性も、別の箇所では彼らがいかにだらしく汚らしいかということを書いていたりする。が、夫が命がけでインディアンと戦っている軍人の妻達でさえも、インディアンと交流するうちに彼らに対して好意を持つようになっていったという手記の記述は、以上の論理を強く支持する例といえよう。最近の研究の成果として、インディアン討伐で有名な軍人カスターの夫人、エリザベスでさえも、土地を奪われるインディアン達に対する同情を私信の中で表わし、自分達白人の方ばかりが本当にいつも正しいのか、と疑問を抱いていたことが明らかにされたのである。

このように、女性の見地から見ると、対立のみと思われていた19世紀フロンティアでの白人対インディアン関係の図式が修正できる。が、女性がいつも“和、調和、平和”の方面に貢献し、男性が“戦い、分裂”の方向へ加担しているというように図式的に割り切ることは危険である。スー族の中には女性の戦士がおり、男性以上の武功をあげることもあった。が、一般的にあって、インディアンの女性達は自分を宇宙の節理の一部と見、子供を産み育てることを最も大事な自分の役割と考えてきた。また彼女達が赤ん坊を手放しで可愛いがり、いつくしむ様子を見ていると、赤ん坊の生命を造化の神のなせる業、自然世界の一部として一種、畏敬の念をこめて見ているのではないかと思えることがある。インディアン女性であれ、白人女性であれ、“命”に最も直接的にかかわる彼女達のやさしい心が、歴史の別の側面を支えてきたことは見逃さないでおきたいと思う。

5) 19世紀後半のアメリカ先住民女性達の活躍

1887年の土地割り当て法以後、事態は一層悲惨となった。白人文化に同化させようという圧力が強まり、政府はアメリカ先住民の伝統的儀式や歌、踊りを禁じた。それとともに、儀式で重要な役割を果たしていた女性の地位も低下した。土地は、この法律の後100年の間に、ほとんど白人の手に渡っていった。

19世紀後半、インディアン達が居留地へ追いこまれると、政府の役人が各戸を回り、子供達は寄宿学校へ行かされることとなった。家族から引き離され、彼らの母語を話すことも禁じられ、伝統的な衣服を着ることも許されず、白人化するための教育を施されたのである。このような学校において、女の子達は男の子達よりも、更に厳しい制約を受けていた。しかし、白人教育を受けた女性達は、身につけた知識と白人のマナー、価値観を武器として、遂には、部族の人々を存亡の危機から救うための運動の中心的リーダーに育っていった。

そのような女性の一人に、パイユート族のサラ・ウィネムッカがいる。彼女は、現在のネバダのあたりにかつて広大な地域を狩りの場、生存の場として持っていた部族の人達が、1860年にリノの居留地に押し込められて以来、急激に貧しくなり絶望的になっていくのを目のあたりにした。この時期、入植者達、兵士達、そしてインディアン局の役人達が土地の権利をめぐる、絶えずパイユートと衝突していた。1879年、彼らは再び移住させられ、今度はオレゴンでしばらく平和に暮らした。が、1878年、彼らの旧敵であるパノック族に戦争が起こり、ミッション・スクールで教育を受けていたウィネムッカは、合州国軍隊の斥候兼通訳となることを志願した。軍隊が、彼女の部族の人々をパノックや、更に土地を求めてやってくる貪欲な白人達から守ってくれるであろうと信じての行動だった。

パイユート族は再び移住を命じられ、食物もほとんどない辛い冬の旅をさせられて、ワシントン州ヤクモの居留地にパノック族と共に入れられた。その時、サラは彼らをオレゴンへ戻してもらおうという大統領令をとりつけてきたが、居留地の役人と兵士達はそれを実行してはくれなかった。そこでサラは、美しい「王女」の伝統的衣装をまとして、部族の人々の権利回復を訴える講演旅行に出た。彼女は自伝の中で、その活動と部族の人々の努力について書いている。重要事項の決定に女性がかかわっていたことについては、次のように述べている。

女性達は、男性達と同じ位、考えがあるのであり、彼女達の意見は、しばしば参考にされました。……話し合いのテントは我々の議会であり、意見のある者は女性でも誰でもそれを述べることができました。彼女達はいつでも、夫達が何をし、何を考えているかに関心を寄せていました。そして戦いにさえ、参加したのです。戦闘中、いつでも準備体制を整えていて、夫達が負傷したり死亡した場合にすぐかけつけて運ぶことができました。……あなた方の国会にも、もし女性が加わるのであれば、インディアンにとってもっと公正な政治が行なわれることと思います⁽⁵⁾。

サラは、パイユートの問題に対してアメリカの大衆の注目を集めるのには成功したが、政

府は思う通りには動かせず、パイユートの権利回復を見ることなく、1891年、彼女は亡くなったのであった。

インディアンの窮状を何とか救おうとする人々の多くが、政府のかたくな態度に業を煮やし、立法府に働きかけて法改正をすることにより、事態を改善していこうとしていた。オマハ族のラフレッシュ家の人々もそのような考えの持ち主であり、白人の教育を受けたことを武器として活動した。父のジョゼフはオマハ族の首長であり、部族の人々が居留地で生きのびられるよう努力した。彼の2人の娘、スゼットとスーザンは国会でロビー活動をし、条約をきちんと実行すること、尊敬を持ってインディアンを扱うことを訴えた。

スーザン・ラフレッシュはフィラデルフィアの女子医科大学を卒業し、インディアン女性としては初の医者となった。彼女の医学教育と東部への文化見聞旅行は、全米インディアン女性連盟から費用が出ていた。医者としては、部族の人々のコレラ、赤痢、インフルエンザなどの蔓延している病気を治し、アルコール中毒の問題にも努力を傾けた。彼女は、部族の人々がこのような状況に陥った原因は、バッファローが白人によって大量に殺されてしまい、そのせいでオマハ族の経済基盤が崩れたことにある、と見ていた。

教育のある上流階級の女性としての服装や言葉使いの出来るスーザンは、姉のスゼットと共に講演旅行に出かけ、インディアンの実状を訴え、結核やその他の病気の根絶のためのロビー活動もした。体を悪くしながらも、政府の無能や腐敗を糾弾し続け、インディアンの人々のやる気や自立性を失わせるような法律に反対することをやめなかった。インディアン達を酩酊状態にして、不法な土地譲渡の権利書にサインさせられたケースも多かったために、彼女は禁酒主義者になっていき、居留地内のアルコール禁止のためにも尽力した。

1854年生まれのスゼットの方は、居留地のミッション・スクール及び東部の私立学校で教育を受け、フランス語が堪能だった。彼女が講演旅行に出る時も、サラ・ウィネムッカと同様に伝統的な「王女」のような衣装を身につけて、アメリカやヨーロッパを回り、バッファローの消滅や条約の不履行、土地割り当て法の下で行なわれているインディアンの土地の窃盗、政府の役人の腐敗ぶりなどを説いた。

彼女としばしば共に旅をしたのが、叔父でポンカ族の首長スタンディング・ベアであったが、彼が、次の章で扱う白人女性ヘレン・ジャクソンを大いに動かした人物である。

6) ヘレン・ジャクソン

ヘレン・ジャクソンは、1881年に『恥ずべき一世紀』という書物を著わし、アメリカ合州国政府がインディアンに対して行なってきた裏切りと悪行とを糾弾した白人女性である。彼女は、白人対インディアンの関係における一つの転換を象徴する人物といえるのだが、それ

も女性であるということに私は感慨を覚えた。

彼女は1830年にマサチューセッツ州に生まれ、父は大学教授で、両親とも敬虔なカルヴィニストであり、ヘレンは厳格な家庭の雰囲気反撥したという。1852年に陸軍技術将校と結婚したヘレンは、夫の勤務に従って各地を転々としたが、続けて夫と2人の息子に死なれてしまった。しかし、悲しみから立ち直ったヘレンは、文学的才能をあらわし始め、詩や散文を発表するようになった。1875年に再婚してコロラドに住みつき、創作活動を続けた。1877年頃から、彼女は西部のインディアン達の惨めな状態に同情を抱くようになり、改革のために尽くす女性に転身した。

1879年、先に触れたポンカ族のスタンディング・ベアが強制移住に抵抗してオマハの連邦地方裁判所に人身保護令状を求める訴訟を起こすと、人道主義的立場からポンカ族を守る運動が強まった。ヘレン・ジャクソンは、この年の11月にたまたまボストンに戻った時、ポンカ族の窮状を訴える演説を聞いて深く心を動かされ、『ニューヨーク・トリビューン』紙宛にカール・シュルツ内務長官を批判する手紙を寄せ、二人の間に論争が始まり、それはいくつかの新聞にも掲載されて、世間に知られることとなった。結局この問題は、ポンカ族の願いがかなった形で解決されたが、シュルツとの論争を通じてヘレンは決定的にインディアンのための人道主義運動にふみ込んだのであり、それまで普通の女流文学者だった彼女がインディアン問題の闘士として知られるようになったのである。

彼女はニューヨークの図書館で数か月間資料と取り組み、1881年『恥ずべき一世紀』が出版されたのであった。この書物は、連邦議会の全議員を含め、インディアン政策に関わりがあるとされた政府役人に贈られたという。この本において彼女が主張したことは、アメリカ合州国のインディアン政策は、正義をふみにじった非道なものだったということであり、独立革命当時以来インディアンの各部族が受けてきた不正と苦しみが述べられている。この書の第一章は、彼女自身が「訴訟事件摘要書」だと呼んでおり、アメリカ合州国政府の罪状を告発している。

アメリカ合州国政府がインディアンに対する信義を繰り返し裏切ってきた歴史をみれば、一国民としてのわれわれアメリカ人が有罪宣告を受けるのは当然である。すなわち国際法の基礎たる正義の諸原則を犯したといわれ、残虐と不信行為のゆえに世の糾弾的とされても仕方がないのみならず、このような罪科にとまらぬあらゆる刑罰……をこうむらざるをえない状況におかれても仕方がないのである。

.....

この不正を正す望みはただ一つしかない。アメリカ民衆の心と良心に訴えることである。

民衆が要求すれば議会も実行するであろう。政府によってかかる悪業が犯され、条約が破られ、盗みが行なわれてきたのは、語るだに恥ずかしいことだが、一部の国民の要求があったからにはほかならない⁽⁶⁾。

またこの第一章の結びには次のように述べられている。

1880年の連邦議会こそ、わが国の残虐行為と誓約違反の記録にはじめて終止符を打ち、アメリカ合州国という名をはじめて一世紀間の汚辱から救おうとする栄光の輝きに満ちた議会になりうる絶好の機会なのだ⁽⁷⁾。

この文章から、彼女が連邦議会の新しい立法に期待を寄せていたことがよくわかる。そして1881年という年は、チェスター・アーサー大統領が年次教書においてインディアン政策を修正し、インディアンの市民権、個人に対する土地の割り当て、アメリカ人なみの生活の向上という3つの点をめざすことを述べた年でもあった。しかし、インディアン政策の転換にこの書がどれだけ貢献したかは評価の分かれるところである。1882年に、ヘレンは内務省の委嘱でインディアンについての調査を行なって報告書を出したが、ワシントンの中央政界を動かすことはできなかった。その後、彼女は小説『ラモナ』を書いて、一般民衆によりわかりやすい形でインディアンの悲惨な状況を訴えようとした。そして1885年、癌のために亡くなった。

彼女の政治的影響力がどのようなものであったにせよ、多くの男性が西部の荒野とインディアンとはひとまとめにして征服すべき対象だと考えていたのに対して、彼女のようにインディアンを同じ人間と認め、彼らの立場に立って合州国政府を糾弾する勇気を持った女性がいたことは忘れてはならないと思う。

7) 現代のアメリカ先住民の女性達

アメリカ先住民の女性達は自分達には与えられていない権利のために闘い始めたが、アメリカ合州国の白人女性達でさえも差別を受けていることに気づき、インディアンのためだけではなく、あらゆる人種の女性達のためにロビー活動をするようになっていった。連邦議会の選挙権についていえば、インディアンでない女性は1919年にそれを獲得し、インディアンの女性は1924年にそれを与えられた。が、市民権と選挙権を得ても、連邦政府がその政策を修正するまで、インディアンの窮状は何ら変わらなかった。1930年代、ジョン・コリアーがインディアン事務局（BIA）の長官となってから改革が始まり、それまでインディアン達を

同化、キリスト教化、文明化しようとしていた方針を改め、インディアンの固有の生活、言語、文化への侵害をやめるようになったのであった。居留地の生活がすぐによくなったわけではないが、ようやく彼らが自分達自身で進む道を決定していくことが許されたのであった。

20世紀初めの改革の時期に、先住民達にとっては伝統文化の復興ということも起こってきた。大陸横断鉄道の完成や第一次世界大戦後の好景気のせいで、エキゾチックな西部へ旅行する人も増加した。部族の従来の土地や水の利用ができなくなって貧困をしいられていた先住民の女性達は、彼女達の伝統技術を生かして売り物になる製品を作るようになっていった。陶器、バスケット、ビーズワークの品々、宝飾品など、観光客が買う土産物を作り、そのための女性の組織も次々と結成していった。古いデザインをアレンジして、芸術品と呼べるレベルの物を作る女性達も出てきた。ホピの芸術家ナンペヨは、古い陶器が発掘されたのにヒントを得て、何世紀も忘れられていた古い形とデザインを復活させた。プエブロ族の芸術家マリア・マルティネスの陶芸品も有名になった。シャイアンの女性達はグループを結成してビーズワークやモカシンを作る仕事を始めた。ナバホの女性達もグループを組織して協力しながらナバホ・ラグの製作に励んでいることを私も現地を見た。このようにして、彼らの伝統的技術も受け継がれていくし、部族の経済にも貢献しているのである。

第二次世界大戦の戦時需要で、白人であれ、インディアンであれ、黒人であれ、女性達は労働力としてかり出されたが、戦争終了と共に、仕事は、戦争から復員した男達へ譲らねばならなかった。中には、軍隊に入隊した特典として高等教育を受け、それを生かしてインディアンの学校の教師や寄宿寮の舎監になる女性もいた。が、インディアンの女性は、一般的に言って、他のアメリカ女性と同様、男性の収入の半分しか稼げず、全米の労働者の中でも最も低いランクに位置している。

1950年代、管理終結（ターミネーション）の政策によって都会へ出ていくインディアンもふえたが、居留地ではまだ伝統的な母系社会の要素が残っていて家族の財産権などを握っていた女性も、都市の労働者となってしまうと、全く弱い立場におかれてしまうのだ。ターミネーションの政策は、再びインディアンを新たな闘争へと向かわせることとなった。この政策をやめさせ、部族の人々の地位向上をはかるために、メノミニエーの女性、エイダ・ディーラーは多くの自己犠牲を払いつつも政治活動にかけ、そして1975年、それは成功をおさめた。太平洋岸のプヤラップ・インディアンの活動家、ラモナ・ベネットはワシントン州を相手に彼女の部族の漁業権を訴え、それも認められた。

インディアンの人々が求めてきた文化・政治面での彼らの自律という目標は、1975年、インディアンの民族自決法が成立することで達成された。

ロビー活動だけでなく、弁護士となって法律面から活動する女性も出てきた。1970年代、

80年代、彼らの固有の文化に対する侵害に立ち向かうために、数多くの先住民女性の組織が結成されていったが、彼らが抱える矛盾や問題は同じようなものだったので、その掲げる目標もみな似た内容であった。

現在、注目されている女性は、チェロキーの代表を務めるウィルマ・マンキラーである。彼女が立候補した時、女性が公職の代表となることに反対する人達もいた。が、彼女の祖先チーフ・ウタシティーが、かつて18世紀の初頭、イギリス人達と交渉する時に、白人女性が全く参加していないことに疑問を抱き、「あなた方の女性はどこにいるのか？」と尋ねたことを想起するなら、歴史的に見てチェロキーの女性達が政治の重要な場面にかかわってきたことが例証されるのであった。

1992年に、コロンブスのアメリカ到達500年ということでインタビューを受けた彼女は次のように述べている。

私達部族の古くからの考え方は、世界の他の人々に重要なことを思い起こさせると思えます。それは、すべての生き物がお互いにつながっていること、そして私達自身の生存も、今、急速に私達が破壊しつつあるこの自然に依存しているということです。この苦悩の500年間、私達を支えてきた伝統的価値体系は、私達が望む通りの道で21世紀へのり出していく時にも、また私達を支えてくれるでしょう。ここ500年の悲史にもかかわらず、1992年に近づく私達には祝えることがたくさんあります。私達の言語はまだ健在ですし、歴史の始まり以来、私達が行なってきた儀式は今も行なわれているし、私達の政府も機能しているし、最も重要なこととして、世界の中でこの一番力のある国のまっただ中で、私達がまだ一つの固有の文化グループを保っていられるということです。しかし、大変な問題に直面していることも忘れてはいけません——部族の自治は絶えず脅かされ、教育レベルは低く、失業率は高く、最低の設備もない住居、そして人種差別です。これらの問題に積極的に前向きに取り組んでいくために、私達は一層、私達自身に頼り、私達の社会、歴史に答えを求めていくのです。私達自身の考え方をまた信用できるようになってきたのです。コロンブス神話ではなくてね。次の500年間で、北米中の先住民にとって再生、復活の時代であることを期待しています⁽⁸⁾。

8) 結び

以上、異文化交流というポイントからアメリカ史を見た場合に、アメリカ先住民の側でも白人の側でも、女性が大いに貢献してきたことを、もっと評価したいと思う。

ポカホンタス神話の場合のように、両者の和解のために利用され犠牲になった女性もいた

し、サカジャウェアのように仲間のインディアン達からは裏切り者と後ろ指をさされることになった女性もいたことであろう。

私は、滞米中に、“Tolerate the other culture.”（異文化を寛大に受けとめなさい）ということをおぼわったが、その“tolerance”の心というのは、家族の中で、自分の要求を抑えても他の人の立場に立って考えることを多く経験してきた女性達によって、大いに発揮されてきた、といえるのではなかろうか。

インディアンの人達のもとを訪ねると、感謝を捧げつつ自然の恵みを頂く心や伝統的な考え方、儀式、技術などを、おばあさんから若い娘達へ伝えているシーンによく出会う。彼らの固有の技術の復活の箇所でも述べたが、それを受け継いでいくのに、今、女性がとても大事な役割を果たしている。そうする過程で、若いインディアン女性達のお手本となり、部族のリーダーともなっていくのだ。

私が敬愛しているナバホ女性のSも、何もなかった彼女の村に電気、ガス、水道をひくことに貢献し、ナバホ・ラグを織る組織作りにも尽力し、コミュニティーの中心人物となっているが、自分自身の立身出世欲などは微塵もなく、自分の受けた大学教育を生かして、地域の人々の役に立ちたいというやさしい心でもって、忙しい毎日を送っている。

彼女の母親は、全く伝統的な生活様式を続けている羊飼いのおばあさんである。少女の頃から自分の受け持つ何十頭かの羊がいて、冬の雪の時期でも、たった一人で馬に乗って羊と共に森でキャンプをする。コヨーテが出れば鉄砲を撃って追い払う。風雪によって刻まれた彼女の顔の皺は、私に尊敬の気持ちを起こさせる。が、貨幣経済が彼女達の生活も支配している現代において、彼女の一家も様々な問題に直面している。

彼女は、自分自身は学校へ行って勉強をしたかったのだが、幼い頃から羊の面倒をみなくてはならず、両親は彼女を学校へ入れてくれなかった。彼らの生活向上のためには教育が不可欠だと考える彼女は、自分の子供達には教育の機会を与えてやったのである。

Sには7人の娘達がいる。21世紀を生きる彼女達がどのように成長していくか、そして彼女達と共に私自身もどのように自己改革していけるかが、私の生涯のテーマである。彼女達と心からつきあうのには、実に難しい問題がつかまとう。歴史の犠牲となってきた人々であるために、「金持ちニッポン」からやって来る私にその代価を求めることがある。が、私は、彼らが大切にしている伝説を語ってくれる時の生き生きとした顔、私の子供をいとしく眺めてくれる時のやさしい目を信じている。

最後に、ポーラ・ガン・アレンというラゲーナ、スー、レバノンの混血であるインディアン女性が書いた詩を引用して結びとさせて頂く。

お祖母さま

自らの身体から、彼女は銀色の糸、つまり光、空気を紡ぎ出した。そして、それを暗闇の世界にそっと運んだ。すべてのものが静止している空間を飛行して。

自らの身体から、彼女はキラキラ光る弦、つまり生命をひき出した。そして、その光を無の上で織り上げた。

時を超えたところから、
 檜の木に向う、そして明るく澄んだ水の流れの向うから
 彼女は織り物の仕事を与えられた。
 自らの身体、自らの痛み、自らの幻影の^よ燃り糸を作品に仕上げる力を。
 そして作り上げたものをまた無に戻す才能を。

彼女にならって、
 女達や男達は毛布を織り、
 人生の物語、光と梯子の思い出、
 無数の目、そして雨へと織り上げる。
 彼女にならって、私は梯子のついた雨の実りのラグに座り、
 そのほころびを糸でつくろう⁽⁹⁾。

注

- (1) 本多勝一『アメリカ合州国』（朝日新聞社、1984）
- (2) Sarah Winnemucca Hopkins, *Life among the Paiutes: Their Wrongs and Claims*. 1883, Reprint. (Chalfant Press, 1985)
- (3) Carol Fairbanks, *Prairie Women in Fact and Fiction* (New Currents International, 1988), p.58
- (4) Glenda Riley, *Women and Indians on the Frontier, 1825-1915* (University of New Mexico Press, 1984), p.190
- (5) Rayna Green, *Women in American Indian Society* (Chelsea House Publishers, 1992), p.72
- (6) ヘレン・ジャクソン他著、平野孝訳『アメリカ・インディアン』（研究社、1977）、pp.49-50
- (7) 同上、p.51

- (8) *Women in American Indian Society*, p.99
(9) *Ibid.*, p.23 原詩は以下の通り

GRANDMOTHER

Paula Gunn Allen (Laguna/Sioux/Lebanese)

Out of her own body she pushed
silver thread, light, air
and carried it carefully on the dark, flying
where nothing moved.

Out of her body she extruded
shining wire, life, and wove the light
on the void.

From beyond time,
beyond oak trees and bright clear water flow,
she was given the work of weaving the strands
of her body, her pain, her vision
into creation, and the gift of having created,
to disappear.

After her,
the women and the men weave blankets into tales of life,
memories of light and ladders,
infinity-eyes, and rain.
After her I sit on my laddered rain-bearing rug
and mend the tear with string.